

現代日本における夫婦像の変容に関する一考察  
——家族心理学における「親密性」概念に着目して

○栗村亜寿香（京都大学大学院）

【1. 背景と目的】

欧米および日本の社会学では、後期近代におけるカップルや夫婦における「親密性の変容」(Giddens 1992=1995)が論じられてきた。本報告では、日本における夫婦関係の理念の変容に関して、家族心理学の学術的議論における「親密(性)」概念の意味内容に着目して検討する。

家族心理学における親密性概念に着目する理由は次の通りである。個人化や脱伝統化、ジェンダー平等の進展等を背景に、後期近代においては従来のジェンダー役割規範に基づく夫婦像が維持されにくくなり、夫婦間の葛藤やニーズを調整し相互に満足の得られる関係を形成する必要があることが論じられてきた。そのような夫婦関係の構築や問題解決に関して、存在感を増してきたのが心理学(セラピー)である。米国に関する社会学的研究では、1970年頃に夫婦間の新たな愛や親密性の理念が台頭したこと、この理念の形成にセラピーが影響を与えたことが明らかにされている(Cancian 1987; Illouz 2008など)。また、A.ギデنزも、後期近代における親密性の変容を論じるにあたってセラピー的な著作を参照している(Giddens 1992=1995; Giddens 1991=2005)。このような米国の動向にくわえて、日本でも1990年頃以降から社会の「心理学化」が注目されていることに鑑み(片桐・榎村, 2011)、本報告では心理学的言説に着目して、日本における夫婦像の変化の一端を捉えることを目的とする。

【2. 方法】

「日本家族心理学会」の機関誌『家族心理学年報』について、創刊の1983年から2009年の論文を対象に「親密(性)」概念の使用状況を調査する。当概念に関する年代ごとの議論の過程、主要論者を明らかにし、関連するキーワードを抽出したうえで、主要論者による他の資料も加えてより詳しい検討を行う。

【3. 結果と考察】

検討の結果、「親密(性)」概念は、1980年代末に登場し、米国を中心とした海外の議論の影響や日本における臨床的知見をふまえながら、感情や性的な結びつきといった意味にとどまらない概念として使用されてきた。すなわち、従来の夫婦関係(以心伝心、一心同体)とは異なる理念——自律と結合のバランス——を表すものとして、自律した個人同士が互いの相違や葛藤と向き合い、感情を分かち合うことを通じて形成するつながりが「親密性」として位置づけられている。以上をふまえ、報告ではこの時期の夫婦像の変化について考察したい。

【参考文献】

Cancian, F., 1987 *Love in America: Gender and Self-development*, Cambridge: Cambridge University Press.

Giddens, A., 1991 *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Polity. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社)

——, 1992 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Stanford: Stanford University Press. (=1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』而立書房)

Illouz, E., 2008 *Saving the Modern Soul: Therapy, Emotions, and the Culture of Self-help*, California: University of California Press.

片桐雅隆・榎村愛子, 2011「特集:『心理学化』社会における社会と心理」によせて『社会学評論』61(4): 362-365.

(キーワード: 親密性、夫婦、家族心理学)